

に出てきたような短期型のプログラムを全学に展開すること、そしてもう1つが長期型のプログラムを実施することである。キャンパスアジアのSDI-Aプログラムは、サーキット型研究留学を推進することで、例えば1年近く海外に留学していても、それが研究とリンクし様々な研究を推進することができるようなプログラムとして構築していく。デザインの学生だけでなく、他の領域からも社会課題の解決に参加することによって本来の研究を推進することが十分に可能と考えられている。これらの研究成果をまとめることによって、修士・博士の研究成果を得ることになり、学位につながる。

そして、さらにもう1つは、未来創造型のプログラムである。ライフサイエンス+データサイエンス+グローバル+デザインで、未来志向型の創造型人材を育成していく。新しい学習モデルを構築しプログラムとして提供していこうと考えている。これには少し時間がかかるが、ENGINEプランのセカンドステージの大きな目標として掲げプログラムを実施していく予定である。

第6節 海外キャンパスの展開

第1項 シャリテ・ベルリン医科大学



写真1-2-6-1 シャリテ・ベルリン医科大学

(1) シャリテ・ベルリン医科大学

シャリテ・ベルリン医科大学 (Charité-Universitätsmedizin Berlin) (写真1-2-6-1) は、優れた医学教育と研究で知られる世界有数の医科大学・大学病院である。ドイツ・ベルリンに4つのキャンパスと100を超える研究機関を有し、ヨーロッパでも最大規模の医療組織である。1710年に創立され、その後フンボルト大学医学部を経て、2003年、ベルリン自由大学医学部とフンボルト大学医学部が統合されてシャリテ・ベルリン医科大学 (以下「シャリテ」) となった。結核菌やコレラ菌を発見したロベルト・コッホをはじめ、ノーベル賞受賞者など多くの医学史上に名を残す研究者を輩出している。日本とは、明治期に森鷗外や北里柴三郎をはじめとした多くの日本人医学生が留学し近代西洋医学の研鑽を積んだことから、医学分野において活発な学術交流が続けられている。

(2) シャリテにおける千葉大学拠点形成

千葉大学とシャリテとの学術連携は、2008年頃の予防医学センターとシャリテのベルリン公衆衛生大学院 (Berlin School of Public Health) との交流から始まる。2010年には千葉大学とシャリテの間で大学間交流協定が締結され、以降、ワークショップや共同での大学院講義などを通して交流はさらに活発化した。2013年以降は、コロナ禍の時期 (2020-2021) を除いて、毎年テーマを変えて千葉大学とシャリテの医学部および大学院学生、若手研究者のための日独集中講義を開催し、教育プログラムの作成とグローバルに活躍できる人材育成を行っているほか、在ドイツ日本国大使館の支援を得て日独シンポジウムを共催している。

(3) 千葉大学ベルリンキャンパス・ベルリンオフィスの設置

千葉大学とシャリテとの教育、研究交流の活発化に伴い、千葉大学は2015年3月にシャリテのミッテキャンパス内にオフィスを確保し、千葉大学ベルリンキャンパスが設置された。そこには双方向遠隔通信システムが備えられ、これによってドイツで勉学や研究を行いながら、千葉大学ともつながることが可能となった。同年4月には、シャリテ国際課内に千葉大学ベルリンオフィスが設置され、千葉大学雇用の職員が常駐し事務機能の稼働が始まった。上記に伴い、2016年5月に千葉大学、シャリテの両大学長によって新たな交流協定が締結され (写真1-2-6-2)、シャリテのミッテキャンパスで式典が開催された。その際、シャリテのPries学長から、今後、両大学

がさらなる連携を強化していくこと、および将来的に共同大学院の設置まで見据えた協働内容が発表された。

今後も千葉大学ベルリンキャンパスは、千葉大学のヨーロッパにおける拠点として、また、両大学の学術交流の場としてさらなる発展とグローバル化が期待される。

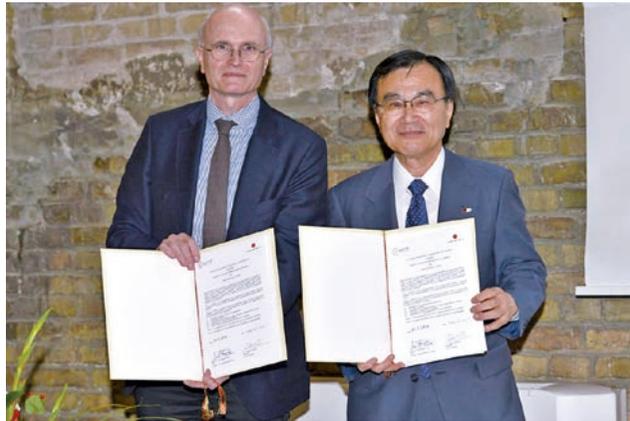


写真1-2-6-2
Axel Pries シャリテ医科大学長と徳久剛史千葉大学長（いずれも当時）

第2項 カリフォルニア大学サンディエゴ校

(1) キャンパス設置の趣旨

感染症、アレルギー、癌の主要発症部位である粘膜組織に存在するユニークな免疫システムである粘膜免疫機構を理解し、制御することで、同免疫が関連する様々な疾患を予防・治療しようとする試みが注目されている。免疫学やアレルギー学において長い伝統を持つ千葉大学にとって、大学・研究機関横断的な国際研究を先導し、1) 学術異分野融合を図りながら新しい学術領域を創成すること、2) 基礎研究からのシーズ創出とその速やかな社会還元のための国際的臨床研究・応用体制を整備すること、3) これら事業を牽引するグローバルな人材育成を目指した国際的研究・教育拠点形成を行うことは重要な使命である。

そこで、2016年、徳久剛史学長と中山俊憲医学研究院長のリーダーシップの下に「粘膜免疫」をキーワードに免疫学、アレルギー学、感染症学、癌生物学、ゲノム医